



CASE

2 かえつ有明中・高等学校

DATA

【学 科】普通科
 【創 立】1903年
 【生徒数】479人(男子259人・女子220人)
 【進路状況】大学139人、その他20人(2015年度実績)

21世紀型の学習と入試で育む クリティカルシンキング

我々は既に21世紀社会を生き始めているものの、それが今後どのような社会になっていくのか、行く末を正確に予測することは難しい。ICTや人工知能(AI)が世界の形を変えつつある一方、気候変動・食糧・エネルギー・テロ・難民等々、グローバルなレベルで容易に解決できない課題が陸続と起きている。子ども達はそんな見通しの利かない時代を生き抜く力をどうすれば身につけられるのか。既に一部の学校で試行錯誤が始まっている。

そこで展開される教育は革新的なものだ。子ども達が教室で学ぶ日常的な風景さえ、20世紀に学校教育を受けた多くの大人達には見慣れない、新鮮なものに見えるに違いない。その新しさ故に、同じ「大人達」である現場の教員にとっても、多くの迷いを抱えながらの挑戦になる。ただそれに取り組む歴史的意義は計り知れない。

本稿では、そんな新たな挑戦を続ける「かえつ有明中・高等学校」(以下、かえつ有明)を取り上げたい。かえつ有明は、1903年創立の私立女子商業学校を淵源とし、戦後長く嘉悦女子中・高等学校として知られてきた学校だ。2006年に創立100周年記念の一環として現在の有明キャンパスへの移転と男女共学化を実施し、中高一貫校として現在に至っている。

かえつ有明が目指すのは「正解のない問いに対応する力」を育成する教育だ。「21世紀型学習」と総称され、今や入試にも応用される等注目を集める。多様に展開されつつある21世紀型学習の可能性について、前嶋正秀教頭や

現場で奮闘する先生方にお話をうかがった。

社会変化に即して「21世紀型学習」へ転換

日本ではほんの20年ほど前までは、右肩上がりの社会に合った考え方が主流だった。社会の中での順位がものを言い、次々に目標を設定しそれに向けて頑張ることに高い価値が置かれた時代だった。しかし、今や社会はグローバル化やボーダーレス化が進み、インターネットの登場が情報のあり方を変えた。情報はネットで検索すれば誰でも手に入る時代になり、先生だけが情報・知識を持っているというのは過去の話になった。教育は大きな曲がり角に立った。大学入試をめぐる厳しい競争が機能した時代には副次的に得るものがあったが、1990年代には競争が緩和された。他方で、塾や予備校の教育産業が高度に発展し、子どもの教育をフォローする環境の整備が進んだ。そんな状況下、子ども達は自分で考えることをせずに、与えられるのを待つことが多くなった。企業からは、新入社員が言われたことしかやらないという不満も聞かれるようになった。本当にこれでいいのか。結局、教育がそんな状態を生み出してきたのではないか。教育の根本的なあり方を変えていく必要性を痛感するようになったと先生方は語る。

では、どのように教育を変えてきたのか。

それは何より、海外の教育にあって日本の教育にない「クリティカルシンキング」を日本の教育に埋め込むことだっ

たと教頭は述べる。「クリティカルシンキング」は時に「批判的思考力」と訳されることもあるが、それが必ずしも定訳というわけではない。ちゃんとした訳語がないということは、概念自体が日本に存在しないことを意味している。

時代の先を読み、日本の教育に決定的に欠けているものを考え抜いた末にたどり着いたのが「クリティカルシンキング」だった。クリティカルシンキングとは、単に情報を受け入れるのではなく、事実と意見を区別して常に論理的であるかを考えるセンサーを持つことであり、欧米では小学校から教育の中に取り入れられている。今文科省が学力の3要素の一つに掲げる「思考力・判断力・表現力」に通じるものだ。国の議論を一步も二歩も先んじてやってきたという自負とともに、今でもかえつ有明の教育の根幹に位置づいているものだと、前嶋教頭は胸を張る。

学校は自分の才能に出会える場

ただ、クリティカルシンキングが大切だと言うだけで、学校がすぐ変わるということはない。今でこそ先鋭的な教育を実践しているかえつ有明であるが、改革に着手したのは今から約8年前。実際の学生の変化を手応えとして感じ始めたのはここ2年ほどだと振り返る。

学校は変わりにくい組織だ。もとより先生達は、従来の知識詰め込み型教育における成功者だ。そんな成功体験を持つ先生達が時代の変わり目を敏感に感じることは難しい。「企業なら四半期だろうが、学校が変わるのにはもっと時間がかかる。気の長い作業だ」と前嶋教頭は話す。だから、学校を変えるために、繰り返し地道に話してきたという。中高一貫校の場合、学校が変わるには、入学してきた生徒が卒業していくまでの6年周期はかかる。その間に、理解者である先生達の数も3人から6人、そして10人へと少しずつ増えてきたそう。そして特にここ2年間で、プログラム実践を担える教員を新たに外部から採用し、実際にプログラムを展開できるようになって弾みがついたという。2014年にはビジョン「かえつ有明2020」を策定し、さらなる改革に向けて拍車を掛けている。

他方で、かえつ有明は改革を進めるに際し、育成したい生徒像や目指すべき学校像を必ずしも明確に定めてきたわけではない。というのも、ゴールを明確にしてそこに向



高校で行われるプロジェクト授業

かって人を作っていくという姿勢が、これまで教育現場に重圧をもたらしたのではないかとの思いがあるからだ。前嶋教頭自身、自らの経験を振り返っても、「押し付け型の教育では子どもの眠っている才能を引き出せてあげられなかった。もしかしたら彼ら・彼女らの可能性を潰していたかもしれない」自戒の念を込めてそう語る。

だからこそ「どんな学校にしたいかと聞かれれば、子ども達が自分の才能に出会える場、それぞれの持っている良いところが引き出される場を作りたい」という。そのためには教員の役割も変わっていく必要がある。これまでのように唯一絶対の正解や価値観を押し付けるのではなく、ファシリテーターとして一人ひとりの子ども達の可能性を「引き出す」ことがより一層重要になる。それがかえつ有明の見据える21世紀の学校・教員像だ。

このように見れば、かえつ有明が実践する取り組みは、教育の原点に立ち戻ろうとするものとも言えるかもしれない。そもそも、教育=educationは、「潜在しているものを引き出す」を意味するeducareが語源だ。かえつ有明では、教員が共感的コミュニケーションを発揮して寄り添うことで、子どもの能力や可能性を引き出される環境を創出することが目指されている。前嶋教頭は「学校は一率で同一的でない、少し変わった子ども自己肯定感を持って生きていける空間であってほしい」とも述べる。そんな教頭の言葉からは、多様かつ包摂的で安心・安全な環境を整えることで、自分と向き合いながら誰もが成長できる学校を作り上げようとする、かえつ有明の明確な姿勢を読み取ることができる。

「サイエンス科」と「プロジェクト科」による革新的な教育実践

では、そんなビジョンを掲げるかえつ有明の教育実践はどのようなものだろうか。

同校の特色の一つは、中学校の「サイエンス科」だ。教科を超えて学び、クリティカルシンキングを育成する教科横断型カリキュラムだ。従前の総合学習をサイエンス科に変えたことが現在も続く改革の端緒だったと前嶋教頭は説明する。

この「サイエンス科」では、教科学習に必要な基本的なスタディスキルを身につけ、適切に他者に伝えるためのトレーニングが徹底して行われる。そこで重視されるのは、正解そのものに到達することではなく、「答えを導き出すためのプロセス」を磨くこと。論理的思考力を駆使して課題を解決していくことが目指される。ここで習得した論理的思考力は、高校の「総合学習」でさらに発展・応用が図られることになる。

もう一つ、高校の「プロジェクト科」も特徴的だ。従来の講義形式の授業ではなく、生徒達が能動的に学習する、まさにアクティブラーニングの授業だ。図表1にある通り、①課題の設定→②情報の収集→③情報の整理・分析→④情報のまとめ→⑤創造的な表現という流れで進められる。このプロセスを通して、知識や経験に基づいて論理的に考え、自分なりの考えを表現し、相手に伝達できる総合的な能力の伸長が目指されている(図表1)。

こうした教科横断型のアクティブラーニングを支える基

盤となるのが、「ランゲージアーツ」と「リベラルアーツ」だ。

「ランゲージアーツ」には、英語の論理的技術の習得から、議論・ディスカッションの作法、作文・レポートの書き方、文学作品の読み方まで、広範な言語技術の学習が含まれる。その中核は、論理的思考を支えるスキルの習得だ。例えば、英語の論理を端的に示す「I think... because...」のような基礎的構造をしっかり身につけることで、自分なりに思考し、自分の意見を主張できるようになるのだという。

こうした考え方の背景には、ランゲージアーツの導入に中心的役割を果たした、山田英雄国際交流部長のアメリカにおける原体験がある。山田先生には、10年ほど滞在した米国で、自分の考えを英語で伝えても理解されなかったという苦い思い出がある。それは決して発音や文法の問題ではなく、ロジックの問題だったと山田先生は振り返る。いくら英語で正しく表現しても、日本人のロジックでは理解してもらえないことがあるという。日本ではロジック構築のためのスキルトレーニングが不十分なのに対し、アメリカでは子どもの頃から5W1Hで整理し思考するスキルトレーニングが徹底され、多様性のある社会を生きていく術が訓練されているという。

この経験を通して山田先生は、日本の子ども達の思考停止は、思考の方法を知らないことから来るのではないかと考えるようになる。考えるためのスキルとして言語を教えること。それが「ランゲージアーツ」につながった。

では、もう一つの「リベラルアーツ」とは何か。20世紀社会まではとにかく知識を獲得・蓄積し、必要に応じてアウト

プットすることが求められたが、21世紀社会はそうではない。必要なのは、獲得した知識同士を活用して構造化し、知のネットワークを広げていくことだ。そこに教科の垣根は不要だ。アクティブラーニングで縦横無尽に学んで思考を深めていくためには、教科や文理の枠を超えた幅広い知識、つまり「リベラルアーツ」が求められるというわけだ。

しかし、こうした新しい学習スタイルによる学びの成果測定には新しい評価基準が必要になる。そこでかえつ有明では、プロジェクトを立ち上げ、「知のコード」と呼ぶ独自のルーブリックを開発した(図表2)。従来のような記憶した知識の多寡を点数化するのではなく、このルーブリックを使って知識の活用の仕方を評価する。図表2にあるような9マスのマトリクスで構成され、論理・倫理・美学の各観点について、守・破・離の段階ごとに到達すべき学習成果が示されている。「知のコード」は、B・ブルームの教育目標の分類(タキソノミー)やL・コールバーグの「道徳性発達理論」を基盤に作成されたものだ。生徒の思考や社会性の発達プロセスを段階的に把握するための枠組みとして広く適用可能だという。

思考力を問う入試の導入

このように、かえつ有明の教育実践は、基礎的スキルの徹底的な習得を踏まえ、多様な知識に基づくアクティブラーニングへとつながる形で構造化され、さらに、その成果を評価するルーブリックの開発が進められてきた。ここには、21世紀における学校教育の新たな可能性を探った1つの結果を見ることができる。

ただ、かえつ有明の挑戦はそれだけにとどまらない。21世紀型学習を促す授業実践は新たな入試の導入に結実している。その一つは、5年前に導入した「思考力入試」だ。「サイエンス科」で展開される学習を入試に応用したものだ。ファクト・オピニオン、コンペア・コントラストといった思考するためのスキルを盛り込んだテストで、知識の詰め込みだけでは対応は難しい。まさにクリティカルシンキングが問われるテストだ。

かえつ有明の挑戦はさらに続く。2016年度入試から「難関思考力テスト」と呼ばれるアクティブラーニング型思考

図表2 かえつ有明「知のコード」

	論理	倫理	美学
離	批判-創造	脱慣習段階	自己-世界
破	分析-統合	慣習段階	自己-社会・自然
守	知識-理解	前慣習段階	自己-他者
リベラルアーツ=感性教育			

力入試を導入した。与えられた課題に対して、グループで議論や対話を通して1つの解を導き出す入試だという。個人単位での知識の習熟度を問う試験ではない。グループワークと個人の作業を組み合わせながら、より良い解答を目指していく試験だ。正解は1つではない。重要なのは、メンバーの力を借りながら自分なりの思考を展開し、自分らしい表現に結び付けていけるかどうかだ。

評価は、そのプロセスを周囲で教員が観察しながら前出の「知のコード」を用いて行うのだという。受験生は「論理」「倫理」「美学」の観点から力があるかどうか評価される。もちろん、評価は1点刻みではない。かといって、落とすためだけの試験というわけでもない。むしろ子ども達の可能性を見ていこうとする試験だという。

それにしても、今回かえつ有明の事例を通して見てきたように、中高レベルの教育や入試が一部で変わり始めていることは、大学にとって無視できないインパクトを持つに違いない。既に、「正解が1つでない」あるいは「正解が1つもない」世界を生き抜く力の必要性を前提に学んだ学生達が、遠くない将来大学に入学してくるからだ。

そんな大学に対し、前嶋教頭は「大学は大学らしくあってほしい」と語る。大学には教養も深い専門もある。その本筋にしっかり取り組むことが、こうした教育を受けてきた学生達をさらに開花させることになる。骨のある人材を育成する大学であってほしいと期待する。高等教育としての大学教育はこうあるべきだという本質論が、もっと語られるべきだという。

確かに、答えのない課題を常に研究し教育してきたのが大学だ。大学が学問を真摯に追究する姿勢を崩さないことこそ、21世紀の学びに貢献できる最も近道なのかもしれない。

(杉本和弘 東北大学高度教養教育・学生支援機構教授)

図表1 プロジェクト科の活動

